

ナマステ



特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌

151号

2023年8月31日発行号

『こすげ冒険学校』を開催しました！！

参加者 14 名を迎え、6泊7日の夏のこすげ冒険学校を開催しました。(詳細は2ページ目からです)



「INCH(祭り)ライブ2023」

9.30~10/1(1泊or日帰り)

秋の一大イベント「INCH祭りライブ」を4年ぶりに開催します！ライブをBGMに、のんびりとお酒、お茶でも飲みながら過ごしませんか！！音楽を愛する方は楽器持参で、腕に自信のある方もない方もぜひぜひお越しください♪音楽しない方はのんびりしていても、もちろんOKですよ～♪冒険学校スタッフの普段とは違う顔も見られますよ！！



- 日程 9月30日(土) 16:00 開演～10月1日(日) 日帰りもOK、早く来られる人は一緒に準備を！
 - 会場：清水バンガロー (小菅村いつものキャンプ場)
 - 対象：子ども単独での参加はできません(全員参加者になるので冒険学校的なスタッフはいません)
 - 費用：日帰り 1,500円 宿泊 3,500円 食事付
 - お酒はカンパ制です。持ち寄り大歓迎！
 - 温泉代は各自(割引券アリ)です。
 - 交通機関
- ※小菅村までの交通は自力になります。
- お申し込み：9/25までに事務局までご連絡ください。
 - 10/1 は予定は無いのでのんびりしてってください。

<スタッフの感想>

岡本雛さん（東京学芸大学 1 回生）

自分自身ここまで自然に囲まれたキャンプが初めてだったのでとても楽しかったです。その中で子ども達が元気に遊んだりする姿を見てとても元気をもらいました。あまり話せなかった子どももいたので次回はみんなと関わりたいです。また、周りのスタッフさん達の準備や子どもと触れ合う姿は本当に勉強になりました。



山本百恵さん（東京学芸大学 2 回生）

2 回目の夏の冒険学校、今年もとても楽しい時間になりました！ありがとうございました！1 週間と長いキャンプの中で子どもたちがたくましくなっていく姿を間近で見れたことがすごくうれしかったです。活動を通して子どもたちと仲良くなれて、いろいろお話しできて、私自身もはっと驚かされることがたくさんありました。子どもたちといっしょに川遊びをしたり、囲炉裏でまったりしたりするのが特に楽しかったです！お米を炊いたり、ヤマメをさばいたりするのも良い経験になりました。また参加したいです！



2023 年度こすげ冒険学校後記

こすげ冒険学校村長 贅田（にえだ）隼人（自然文化誌研究会運営委員）

まず、大きな怪我や事故が起きることなく、冒険学校では初めての村長を務めることができ、ほっと胸を撫で下ろしている。これまでも楽しく参加してきたが、やはり比べ物にならないくらいの達成感がある。今回の冒険学校は、コロナ禍から始まった沢遊びや囲炉裏、台所の制限が緩和され、伸び伸びと活動を行うことが出来て、ここ数年の活動の集大成になったと感じている。

参加者たちは、それぞれのペースで、興味のあることにじっくり取り組んでいた。冒険学校を経験している子たちが休息も含めた活動のリズムを作ってくれて、初めて参加した子も決して無理することなく過ごすことができていた。今回は特に、沢遊びや工作・染め物の他に、トランプやボードゲームで大いに盛り上がっていた。名前をたくさん呼び合って仲を深めたり、その場にいる子たちみんなが楽しめる遊び方をしたりしていて、囲炉裏やログハウスの一室から楽しそうな声が聞こえてきたのが大変微笑ましかった。また、キャンプ場の外に出る機会を何度も作ることができたのも良かった。沢登りは、昨年経験した子を中心に難しいコースを選んで挑戦していた。去年は出来なかったところがクリアできたことを話してくれたり、初めて沢登りをした子がまた行きたいと言っていたり、1 番楽しかったことで沢登りを挙げていたりしていて、夏しかできない遊びを満喫してくれたことが嬉しい。夜にはヘリポートからの星空観察をして、天の川を見ることができた。夏の星空観察であれだけきれいに見えたのは自分としても初めてだった。そのままナイトハイクへと活動をつなげて、夜も充実した内容にできた。

今回の冒険学校でも、充実した活動ができたのは、たくさんのスタッフの参加があったからに他ならない。小集団には3チーム出すことができ、それぞれのチームが内容の濃い活動をしてきてくれた。ベテランのスタッフはそれぞれの力を存分に発揮し、初めて参加してくれたスタッフは参加者と同じくらい、面白いことへのアンテナを張り、チャンスを逃さず活動に参加し、楽しんでくれていた。冒険学校がそういった雰囲気スタートできたのは、7月にスタッフ研修会を行い、キャンプ場のことや小菅のフィールドを知ってもらったことや、事前準備で何人ものスタッフが集まり、作業をしつつ、交流をすることができたことが大きいと思う。後片付けにも20人以上のスタッフが協力してくれて、長かった冒険学校が終わった後の充実感や、賑やかだったキャンプ場が片付いた少し寂しい感じを一緒に味わうことができたことも嬉しかった。今から、まふゆのキャンプや来年の冒険学校でみんなが集まり、どんなことができるのかを想像すると、その日が来るのが待ち遠しくてたまらなくなる。最後に改めて、本当に多くの人の助けがあって冒険学校が実施できた。関わってくれた皆さんに感謝をして終わりたい。



National Institution For Youth Education
 国立青少年教育振興機構
 「子どもゆめ基金助成活動」

体験の風を
おこそう

令和5年度の助成を受けて開催しました。

「冒険学校 まふゆのキャンプ」 12.26~28(2泊3日)

毎年恒例の「冒険学校まふゆのキャンプ」を体験して、暖かいお正月を迎えませんか？

小菅村ではお正月の準備がもうはじまる頃です。日中は、村内を自由に動き、村の中でもちょっと面白いところに行きましょう。焚火・薪割り・ナイトハイク・星空観察・バードウォッチング・滝探検・・・その場で思いつく限り、いっぱい遊んで、食べて、寝る。そんなキャンプです。個性あふれるスタッフがみなさんの参加を待ってます！！

日程：12月26日(火)～28日(木)

場所：清水バンガロー(小菅村のいつものキャンプ場)

宿泊：一人用テント・ログハウス・野宿など

対象：小学校3年生～中学校3年生

定員：15名(先着順です)

参加費：会員¥28,000 非会員¥30,000

(奥多摩駅からの交通費・食費・宿泊費・保険代などを含む)

申込み：ハガキ・もしくはE-mailに住所・氏名・年齢(学年)・性別・電話番号を記入の上、事務局まで参加をお伝えください。



<国土緑化推進機構 令和5年度「緑と水の森林ファンド」助成事業です>

宮本茶園 宮本透

昨年秋に体調を崩し救急車で搬送されてから1年、肥料・有機資材等重量物を扱う作業が辛くなりました。機械を使う整枝作業や摘採作業は息切れして長い時間続けられず、前号では昨年に比べ一日の摘採茶葉重量が減っていると記しました。摘採作業終盤の朝から蒸し暑く日差しが強い日、摘採機操作が出来なくなりました。目まいがして立っていられずヘルパーに作業を替わってもらい、這いずるように日陰に入りへたばってしまったのです。

午前中の作業が終わり、皆さん心配して「心臓が悪いよだから、大きな病院へ行って医者に見てもらいなさい！」と言われます。特に昨年心筋梗塞で救急搬送された方の体験談は私の症状と重なり命にかかわる事と真摯に受け止め、上野原市立病院で精密検査を受けました。処方薬を服用してからは目まい・息切れ症状が解消され酷暑の中での野良仕事を順調にこなしていますが、主治医からは「入院して手術を受けるように」と診断されています。「六十にして耳順う」、農閑期になったらしっかりと治療を受けて健康寿命を延ばしたいと思います。

・佐野川茶相模原ブランド構築の取り組み

藤野茶業部佐野川茶製品はJA 神奈川つくと観光協会の店舗販売が主ですが、新茶を心待ちにしてくださるお客様は増えています。今年の新茶は諸事情で製造が遅れ発売は6月中旬となりましたが、発売日の問い合わせを多数いただきました。あぐりんずでは商品棚へ新茶を並べていた時「今年は遅かったじゃないの。ずっと待っていたのよ」と声を掛けてくださったお客様がいらっしゃいました。全く面識のない方でしたが「親戚や知人に配るから」と納品した半数近くを購入していただき、とても励まされました！

昨年6月に商標登録の手続きをしてから半年、2月下旬特許庁から登録証が交付されました。佐野川茶はJA 神奈川つと藤野茶業部農家が県農業技術センターの栽培指導で生産する茶葉を、茶来未が12微細分類製茶法で焙煎加工した製品であると社会的に定義されたわけです。今年は相模原市役所みんなのSDGs推進課へ「さがみはらSDGsパートナー」、農政課へ「さがみはらのめぐみ」登録申請を行いました。

「さがみはらSDGsパートナー」は7月24日市役所で登録証盾交付式が開催され、本村市長より津久井産材で作られた盾をいただきました。式典では市長やパートナーとの意見交換があり、参加者に藤野茶業部の佐野川茶相模原ブランド構築の取り組みを伝えました。「さがみはらのめぐみ」は相模原産農産物の認証で、登録申請後に審査がありました。6月半ば農政課担当職員が佐野川へ来訪し茶園視察と生産履歴確認をされたのですが、案内しながら藤野茶業部の現状をつぶさに伝えました。審査後に認証シールとのぼり旗が交付され、あぐりんず夏の感謝祭で佐野川茶試飲コーナーを設け相模原ブランドをアピールしました！



・夏の茶仕事

今年は県知事選があり神奈川県職員人事は6月1日でした。県農業技術センター津久井地区担当は山崎先生が移動し黒澤先生に引き継がれました。夏整枝講習会では上岩茶園の深刈り更新剪枝指導を希望しましたが、黒澤先生は「今年は茶園の更新をせず、一年かけて佐野川茶の今後を考えて行きましょう」と言われます。急遽経営相談となった今年の夏整枝講習会、最近先輩茶業部員引退後を見据えた茶園経営を考えていたので若い後継者育成のアドバイスを求めたところ「今の経営状況で、若い新規就農者に佐野川茶栽培を宮本さんと一緒に取り組みなさいと勧める事が出来ますか？」と逆に質問され、何も言えなくなりました。木俣師から「儲からない農業経営を自慢するのは止めなさい」と言われた事と重なり、初回指導からいきなり難しい課題が出されました。

木村先生から連絡があり、大洞茶園での夏整枝作業職員研修を依頼されました。管理職になってからは会う機会が減らない木村先生なので、再会を楽しみに機械を用意しました。久しぶりに上岩を訪れた先生は中切り更新剪枝した茶園や再生させた荒廃茶園を見て「頑張っていますね。見違えるような茶園になりました！」とほめてくださいました。7月10日からアルバイトを頼んで夏整枝作業をしましたが、摘採できなかつた新芽は大きな葉になり病気が発生して

います。畝間に刈り落とされていく枝葉を踏みしめ作業をしていると空しさがこみ上げました。猛暑が続きますが、今は夏肥をたっぷり吸収し色鮮やかな新芽の出た茶園でつる草を抜いています。

・第45回相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会

茶園に春肥を施した後の肥料袋を持って内郷へ出かけ堆肥を詰め込み搬送、元肥に施して土作りをする作業は花卉畑恒例早春の野良仕事となりました。4回目の花卉栽培、今年は病院通いの影響して作業が滞り昨年会場飾花で好評だったロシアヒマワリを播種したのは6月下旬でした。吉田さんが苗の定植や追肥・除草作業を担って下さいましたが昨年並みの生花は用意できないと判断し、事務局に会場飾花用花卉を手配してもらいました。幸い篠原の four peas flower が引き受けてくださり、ヒマワリ・ジニア・コスモスにダリアが加わりました。

追悼会に先立つ7月20日神奈川県藤原中高級学校フィールドワークが行われ、今年は生徒たちへ献花用生花を届けた後花卉栽培に取り組む思いを語る時間をいただきました。1980年代八王子養護学校の生徒たちと学んだ浅川地下壕建設の歴史、教員時代「日の丸・君が代」強制と闘い神奈川県教委から受けた処分、処分撤回裁判で出会った元兼崎寺徴用工の在日韓国人、教員失職と新規就農、生徒たちは私の人生観や日本が犯したアジア侵略戦争被害者への謝罪の気持ちを真剣に聞いてくれました。

追悼会前日実行委員が花卉畑で生花を収穫して会場準備を行いました。7月30日コロナ禍での制約が解除され4年ぶりに参加者が集う会場では各界あいさつに併せて子どもたちの合唱や韓国舞踊が披露され、たくさんの方が相模湖・ダム建設殉職者に献花して下さいました。



・雑穀街道普及会の活動

復活2年目第12回自給農耕ゼミ(佐野川) 雑穀栽培講習会は予定通り5月21日開催、継続メンバーに「つぶつぶ雑穀パワーフェス」参加者やINCH 後輩の大澤さんが加わり播種作業を行いました。ピーボ原料のキビを主に、見本園には学生時代木俣研で旧秋山村を調査し入手したモチアワも植え付けました。9時上岩雑穀畑集合午前中は実習、午後は石楯尾神社境内で昼食を食べながら木俣研講義そして流れ解散という大まかな時間配分で、6月・7月は追肥・除草・土寄せ、8月は防雀ネット張りをしました。秋には収穫や和田のJazz Brewing Fujino 工房見学、冬には味噌・醤油仕込み等、毎月ゼミを開催できるように準備しています。植物と人々の博物館メルマガで日程確認して参加お申し込みください。

8月9日上野原市長と3回目の面会がありました。参加者は雑穀街道普及会、ワノサト・エコビレッジ、INCH、NPO さいはら、上野原市農業委員会が14名、上野原市が市長・職員7名の大きな会議でした。縄文リビングラボの旧西原小学校施設活用案、植物と人々の博物館・雑穀街道普及会やNPO さいはらの活動紹介、行政と各団体の意見交換等重要な問題が話し合われ、9月に上野原市役所で雑穀街道を世界農業遺産に登録申請する説明会が開催される事になりました。この説明会は来年2月の農林水産大臣への申請準備に向けて大きな節目となるでしょう。しっかり準備をして関係機関や関心のある市民に呼びかけ、たくさんの参加者を集めたいと思います。



※佐野川での雑穀街道普及会活動に興味のある方は宮本携帯(090-2205-8476)へご連絡ください。



植物と人々の博物館
Plants and People Museum

Vol.32

国際雑穀年
2023



国際雑穀年 (International Year of Millets) の今年、雑穀街道をFAO世界農業遺産に登録申請することを目指した「雑穀街道普及会」の活動も活発になっています。8/9(日)に上野原市長と3回目の面会を行い、来年2月の農林水産省への登録申請に向けた補足と上野原での活動に関する意見交換を実施しました(参加者21名)。上野原市に隣接する相模原市緑区(佐野川地区)では、継続的に雑穀の栽培管理技能を学び語らう自給農耕ゼミ(佐野川)を開催しています(参加者10名程度)。連携関係にある上野原西原でもNPOさいはらによる「お山の雑穀応援団」が開催されています。雑穀を一緒に作り、食す環に参加してみませんか？

雑穀街道普及会：<http://www.milletimplic.net/milletsworld/millstr.html>

自給農耕ゼミ(佐野川)：<http://www.ppmusee.org/event/pg651.html>

お山の雑穀応援団：<https://www.facebook.com/zakkokumura/>

本会も長年お世話になってきた上野原市西原の篤農 中川智さんの四季の栽培技術を60分のドキュメンタリーとした「種子をつなぐ人」が製作されました。9/10(日)に完成披露上映会&交流イベントが上野原市西原(西原 life 体験宿したで)で行われるそうです。DVDは2,000円/枚(送料込み)でも入手可能のようです。

国際雑穀年記念・東京学芸大学創基150周年記念として、「雑穀発泡酒 ソビボ・ピーボ(素美暮発泡酒)」の醸造を行います。ぜひ、ご賛同いただき、仮予約頂ければと思います。価格は1口(330ml瓶6本入り)で5,500円(送料込み)。宜しければ任意の寄付を加えて頂ければ嬉しいです。ご質問や仮予約申込は、雑穀街道普及会事務幹事 木俣(kibi20kijin@yahoo.co.jp)までお送りください。

内容量...330ml
無ろ過のため、瓶底や瓶内に原料の微片や酵母が溜まっている場合があります。
飲用は20才になってから楽しんでください。
ビンが割れて怪我をしますおそれがありますので、衝突、凍結、直射日光を避けて、丁寧に扱ってください。

sobibò
πιβο
ピーボ

2023 国際雑穀年記念
Sobibo Πιβο made from millet.
Let's drink together.

製造者
Jazz Brewing Fujino
山口県
神奈川県相模原市緑区
佐野川 659-3

賞味期限

要冷蔵(10℃以下)

発泡酒 アルコール分 5.5%

150th
東京学芸大学創基150周年

英国産麦芽70%、神奈川県産野産キビ30%
その他の材料...ドイツ・神奈川産ホップ、イースト酵母

麦芽使用率50%以上

©大橋弘

種子をつなぐ人

西原 中川智さんの雑穀栽培の暦

完成披露上映会 & 交流イベント



2023 9/10 (日) 第一部: 14:00~16:00
第二部: 17:00~19:00

参加費 1,500円 雑穀葉子uppNORAのカレット (高黍と粟のクッキー)
自家焙煎オーガニックコーヒー付

※映像の上映時間は約60分です。※各回定員25名

※お子様連れのご参加も可能です。ご予約の際にお申し出ください。

山梨県上野原市西原の原地区に生まれ育った中川智さん(1937生まれ)は、
西原で本格的に雑穀栽培をする最後の農家です。

もともと農家は、自家採種で作物を作るのがふつうでした。

秋に収穫した物の中からよくできたものを選び、来年の春に播く種子にする。

これを毎年繰り返すことで、長い時をかけて品種改良してきたのです。

栽培をやめれば、種子も失われます。

西原ばかりか全国の雑穀の種子が失われつつある今、中川さんが栽培を続けているのは、
順繰りにいのちをつないで、種子を守ることでもあるのです。

栽培を志す人のために、中川智さんの雑穀栽培の四季を記録しました。

映像の完成を共に祝い、雑穀がある暮らしについて、語り合しましょう!

会場:西原ife体験宿したで 〒409-0141 山梨県上野原市西原1738

19:00~ 囲炉裏を囲んで炉端焼き交流会あり (参加費2,000円)

宿泊 (朝ごはんつき) 4,500円

申込み: info@nokke.life まで下記をメールしてください。

①代表者氏名 ②人数 ③第一部か第二部か ④囲炉裏交流会や宿泊希望の有無



共催: 合同会社古民家のつけ

「種子をつなぐ人」映像制作プロジェクト

制作スタッフ: 著述家 陸田幸枝、写真家 大橋弘、映像作家 三梨朋子

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.9 その10

報告「IUFRO（国際森林研究機関連合）DIV.5の国際会議に参加して（第1回）
長濱和代（林業経済研究所）」

2023年4月から千葉の家に帰り、林業経済研究所で研究員を、お茶の水女子大学附属小学校では算数の講師の仕事 시작했다。朝の満員電車に慣れてきた6月上旬に、IUFRO（国際森林研究機関連合）Div.5（林産物や木材の持続的利用部門）の主宰する国際会議に参加するため、オーストラリアのケアンズを訪れた。

IUFROとは、International Union of Forest Research Organizationsの略称で、森林研究の促進と協力を目的として設立された国際的な組織である。歴史を遡れば、1892年にオーストリアのウィーンで開催された国際会議により、森林研究の国際的な協力の必要性が議論され、International Forestry Conference（国際森林研究会議）が創設された。その後の名称変更を経て、1982年に現在のIUFROとなったとされる。IUFROは130年余りの長い歴史があり、世界中から森林関連の研究者、政策立案者、専門家らが参加して森林に関する情報交換や協力を行うことで、世界的なネットワークが構築できる場でもある。

開催期間は2023年6月4日から8日までで、9日にはエクスカージョンとして世界最古と言われる熱帯雨林へのツアーが催行された。本報告では時間軸に沿って、全体のプログラムに筆者の個別行動も交えつつ、2回に分けてIUFROへの参加報告をさせていただく。

【6月4日】会議1日目

国際会議のスタートは、日曜日の14時からであった。私は2日の夜に成田空港を出て、3日の朝に余裕を持ってケアンズ空港入りできればと、2ヶ月前からチケットを購入していた。ところが、4日午前9時から専任教員になるための面接が入り、初日からの国際会議の参加は困難となった。そこで1週間前に急遽、航空券の日程手続きをして、出発日を2日から4日に遅らせることにした。コスト面での支出を抑えようと、JETSTARを予約していたので、国際線の変更手数料はおそらく高額であろうと恐れていたが（国内線の変更手数料は3千円かかる）、ナント！50円で済んだのはありがたいことであった。

初日はメイン会場での1時間のワークショップと、「オーストラリアにおける最新の研究と技術」というテーマで1時間半のパネルディスカッションがあり、さらに17～19時まで会場の外でオープニングのための夕食会があった。この会に参加するためには、全体の参加料金とは別に参加費を支払っていたのだが、個人的事情により1週間前のキャンセルによる返金は困難とのことであった。今回は、日本人同士でできるだけ連ます、海外の研究者とのネットワークを構築できればとの考えがあり、単独で申し込んでいた。発表者プログラムを確認するなど事前に知り合いの参加がわかれば、食事の権利を譲ることができただろう。

この日の晩、20時に成田空港からケアンズへ向かった。時差は1時間で乗り換えなしの7時間で、早朝に着く。となりの座席は旅慣れたオーストラリアの先住民族のアボリジニと思われる女性2人連れで、日本滞在を楽しんだことを嬉しそうに語っていた。彼女らは離陸する前から就寝準備を始め、離陸とともに静かになった。彼女らを見習って、私もすぐに眠ろうと目を閉じた。

【6月5日】2日目

早朝の機内アナウンスで目が覚める。就寝が早かったので、夕食用にオーダーしたチキンカレーが椅子のポケットに入っていたので、傷んでいないかを確認して口に入れた。何か食べておかねば！入国審査の質問時に、眠くて答えられなくなったら困るのだ。

朝4時台のケアンズ空港では、成田からの便だけでなく大阪からの便もあって、到着した乗客らで賑わっていた。入国審査は、パスポートを機械にかざして、無人の改札を2カ所通る。日本出国前に、オンラインで個人情報入力をしているので（スマホにETAのアプリを入れて入力するシステム）、よほどの問題が起きない限り、声をかけられることがなかった。ただ検問フロアの係員から「携帯電話の操作は禁止、電話も撮影

も禁止。」と注意を受けた。入国証明のスタンプはもらえず、電子ヴィザでない国の人たちの列に並べば良かったのかもしれない。次は申請しようと思う。

入国審査で頑張ることは特になく、空港到着ロビーにでる。単身で来たので迎えはない。「さて、いつものように公共交通機関で移動しよう！」と外へ出るとまだ暗く、しかも雨が降っている。「乾期のはずなのに。でもこれは歓迎の雨かも。」と良きに解釈して、公共のバスが動くまで空港で待とうと考えた。市内までの鉄道は地図上では存在するが、一日に何本も走っているわけではないようだ。到着ロビーでは、HISのシャツを着た現地スタッフがお客の出迎えを待っていた。目が合ったので、移動について尋ねたら「国際線のバスはまだ動いておらず、国内線の乗り場まで歩く必要がありますが、タクシーは20ドル位で（A\$は1ドル=約98円）市内のホテルまで行きますから、一番オススメです。」と親切に教えてくださった。でも1人でタクシーに乗ると辺鄙なところへ連れていかれたら怖い。でもここは先進国だしどうしようか、と逡巡したあと、でも勇気を持ってタクシーに乗ろう！と決めた。それでも、もしの場合は逃げられるかな？と不安を募らせつつ、雨の降る暗い屋外へ出た。

タクシー乗り場では、ライセンスを持つマークをつけたタクシーが並んで乗客を待っていた。毎年訪れるインドでは、外へ出るとタクシーから声をかけられるが、ここはインドと違って安心できそうと思えた。乗り場の前に立つと、タクシーのドアが開いた。老齢の女性運転手が座っている。「強面の男性でなくて良かった！」と安堵した。聞けば彼女は元小学校教員で、60才で退職してから、大好きな車の仕事をしているのだという。現在75才で現役ドライバーとのこと。英語のオーストラリア訛りは聞きづらいが、好きな仕事で稼ぐ姿に頼もしさを感じた。

ケアンズ駅前にある私の安宿までは15分くらいで、25ドルで到着した。宿では灯りが消え入り口に鍵がかけられている。電話をすれば、「朝7時以降でないと、チェックインしていない人は入れない」とのこと！ピンチ到来と思われた。女性運転手に相談すると、彼女は次の手を考えた。「私の知っているヒルトン・ホテルのロビーは、早朝でも好きなだけ待たせてもらえると思うから大丈夫。」と、私を乗せて、ホテルへ車を進めた。駅まで引き返すよりは、確かに市内のホテルのロビーで待つ方がよい。ホテルでは、彼女の交渉により、朝5時台であったにもかかわらず、玄関前ロビーで待たせていただけることになった。タクシー代は35ドルを超えたが、高級ホテルロビーの椅子の居心地は良く、明るくなるまで休むことができた。ケアンズ到着初日は、朝から前途多難であった。

朝8時までロビーで過ごし、スマホとPCのバッテリーもチャージさせていただいた。近くで暇そうに座っていたツアー会社の人と話をしたら「ケアンズ初日のツアーでは、グレートバリアリーフの海で泳ぐか、熱帯雨林の森を歩くのがオススメ！」とのこと、フリーの日には鉄道に乗って熱帯雨林を見に行きたいとの思いを募らせた。

IUFROの最初のセッションは9時10分に始まるため、安宿にスーツケースを預けるか迷ったが、雨がまだ降っていた。会場のコンベンションセンターは近いことがわかったので、タクシーで、直接、会場へ向かうことにした。次のドライバーはインド系で、私の馴染みのある英語だったので、ほぼ理解できた。

コンベンションセンターへ到着すると、外に何も表示が出ていない。また「困ったなあ」と回りを見回すと、海外からの研究者と思われるグループがいる。聴けば「IUFROへの参加」でドイツから来たとのこと、彼らのあとについて、センターの中へ入りレセプションまで案内いただいた。随所に飾れた美しい現地アートが印象に残った（写真1）。



写真1 ケアンズの
コンベンションセンターの内部展示

2日目のプログラムは、9時10分から10時まで、全体セッションとして「Certification and Sustainable

Forest Management」オーストラリアにおける持続的な森林管理についてのプレゼンテーションを聴いた後、30分の休憩（お茶タイム）を経て、10時30分から3つのセッションに分かれて、個別のプレゼンテーションタイムとなった。セッション1では、「In-forest Wood Quality Assessment」、2ではFWPAのスポンサーがつき「Application and Prospects of Interdisciplinary Forest Product Identification and Traceability Approaches」、そしてセッション3では、「Material Characterisation」に関わる発表であった。各20分の持ち時間で、質疑応答も含まれる。セッション3では、入り口でお会いした女性のドイツ人研究者 Franka Brüchert 博士が司会を務めていたので、5人の研究者の発表を伺った。木材利用とその性質に関する自然科学的な分析のため、具体的な数値に関する理解はかなり難解であったが、こうした手法や分析から学ぶことは、今回の参加の目的の1つでもある。

12時10分からはランチタイムとなり、会場内でお昼から豪華なディナーがbuffet形式で提供された。テーブルに乗っているトレイの数は、30個近くあっただろうか。冷菜、温菜、メインディッシュ、果物、デザートは食事の後半から、運ばれてくる。どれも自分のお皿に乗せたら食べきれないほどであった。こうした雰囲気の中で、各国からの参加者と食事を通じてコミュニケーションを図るのである。この豪華なランチは、5日目（最終日）まで毎日続いた。IUFROへの参加費は、早割でも1,050 A\$（約10万円）を要するため、参加費は決して安くはないが、会を盛り上げるための食事とコミュニケーションの場の提供も含まれている。



写真2 全体セッションでのエバンス博士の発表

13時10分からは、またメイン会場に集まり、学術的な講義としてオーストラリア国立大学の Philip Evans 博士による「Advances in the biomimicry of wood for development of novel additively manufactured materials」のレクチャーがあった。美しい写真を交え、スライドのデザイン性は高く、会場の聞き手に語りかけるような Evans 博士のプレゼンは素晴しかった。自然を利用して技術革新を促すバイオミクリー (biomimicry) の手法は、日本の新幹線などで取り入れられ、とりわけ木材は自然界の軽量構造材料として注目され、材料開発により木材利用の場でも期待されているとのが分かった。論文では、日本人研究者が第1著者であり、この研究チームの多様性も見事である (Tao et al. 2023)。

14時から、アフタヌーンティの時間を挟んで、6つのセッション (Promoting Data-Driven Methods for Species and Origin Identification of Forest Products, Outcomes from Forest Products Culture 1, Credence Attribute, Roundwood Sorting and Grading, Future Pathways to Forests, Business and Sustainability 1, Wood and Forest Cultural Heritage in Australia, including Aboriginal Wood and Forest Culture)が開かれ、合計20名の研究者から発表があった。特に興味深い内容だったのは、2015年にソルトレークシティの国際大会でもお会いした Charlotte Chia-Hua Lee 女史が司会を務めた「木材利用文化のアウトプット」のセッションだった。彼女は国際木材利用学会の幹事を務め、名刺も英語、中国語、日本語を用意して、木材利用の文化を国際的に広げている伝道師でもある。またインドヒマラヤ地域の木材利用の特徴について発表された Sangeeta Gupta 博士の発表も興味深く、発表後に勇気をふるって質問をさせていただいた。研究交流のメインの場は、やはり発表後のディスカッションであることを実感した。2日目は、16時50分で終了した。

その後、スーツケースを含むすべての荷物を会場から宿へ移動させ、チェックインをしてシャワーを浴び、近所のスーパー (COLES) で滞在分の食事を買って、明日の自分の発表に備えることにした。発表スライドを40枚くらい用意していたが、さらに少なくして25枚にまとめた。

【6月6日】3日目

6時(日本時間で7時)に、鳥たちの声で起床。朝方に降った雨が上がったので、ケアンズの海辺まで散歩へ出かけた。駅前の宿からビーチまでは、徒歩で10分くらいの場所にある。途中、亜熱帯地域の樹木に出会い、特に巨木のバンヤン・ツリー(インドの国樹でもある)に魅了された。

ケアンズのビーチに沿って、ホテルやレストランが多くあり、遊歩道が整備されている。朝7時前後の散歩では、数人の清掃員の人たちが路面の雨を掻き出していて、ゴミひとつ落ちていない。美しい海辺の観光地は、毎日の清掃により維持されているのだと実感した。砂浜には、実生から芽吹いた10~15cmくらいのマングローブが点在

している。放置すれば、このビーチもマングローブ林で覆われるだろうが、定期的に海と浜辺の緩衝地域も管理されていて、ある時期にマングローブがゴミとともに一掃されるのだろう。空と海が広がるすばらしい散歩コースで、次にケアンズに来る機会があれば、海外沿いの宿に泊まれたらなあと思われる場所であった(写真3)。

この日のプログラムでは、朝8時半から全体セッションが準備され、午前中に5つのセッションと20つの発表が行われた。午前中には2名の日本人の発表があり、二人とも宇都宮大学から参加された博士課程の院生とのことで、木材特性の半径方向変動モデリングについての内容であった。ランチをはさんで、午後は3つのセッションに分かれて18つの発表があった。私は「Community and First Nations Forestry」(コミュニティと先住民族の林業)のセッションに入れていただき、インド・ウッタラーカンド州の住民の自治的管理組織である森林パンチャーヤトを事例として、木材利用とコミュニティ林の管理について発表した。質疑応答では、インドのFRI(Forest Research Institute)の研究者から、女性の森林利用について、年齢ごとのグループで分けて利用の特徴を明らかにすると、住民参加の要素が見えてくるとの助言をいただいた。同じセッションでは、アメリカの森林研究所のシニア研究員であるDavid Nicholls博士や、カナダからの大学院生であるAndréanne Girard-Lemieux女史の発表があった。David博士からは、ティータイムに知り合いの日本人研究者を見つけて話をしていたところに話かけていただき、ネットワークの作り方を教えていただいた。Andréanneさんは修士課程の学生で、ケアンズに来るために周囲から寄付を募り、旅費と宿代を捻出したとのことで、そのパワーに圧倒された。この日は、15時にすべてのセッションが終わりフリータイムとなったので、現地で知り合った研究者らとともにクラフトビールのお店で懇親を深めた。

今回のIUFROでは日本人の参加者は、自分を含めて4名であり、参加者全体の割合としては少ないと思われた。日本人は6月のこの時期において、海外に出にくいのかもかもしれないが、木材利用に関する研究についての日本からの発信力と存在感が期待される。(次号に続く)

【参考・引用文献】

・IUFRO, DIV.5 The Forest Treasure Chest Delivering Outcomes for Everyone, 4-8 June 2023 Cairns, Australia 公開プログラム https://www.iufro-div5-2023.com/_files/ugd/39a717_1d90c6e1721b41d28f74bfdce49c48cc.pdf

・Jin Tao, Pejman Tahmasebi, Md Abdul Kader, Dengcheng Feng, Muhammad Sahimi, Philip Evans, Mohammad Saadatfar (2013) Wood biomimetics: Capturing and simulating the mesoscale complexity of willow using cross-correlation reconstruction algorithm and 3D printing, Materials & Design 228, 11pp.

<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0264127523002277>



写真3 ケアンズの海岸
(左が遊歩道、潮間帯にはマングローブが見える)

【お知らせ】

6月に岩波書店からジュニア向けに本を出しました。

<https://www.iwanami.co.jp/book/b626354.html>

福岡で教員に着任する前に着想してから4年をかけて書きました。森林資源を循環させる森の使い方を実践できる社会の実現をめざします。

表紙のイラストでは、「ここは天然林？それとも人工林なの？」
「木は伐られるから泣くの？」という問いを設定しています。

本書は「岩波ジュニアスタートブックス」として、探究学習に最適な本が他にもラインアップされています。

地域の図書館や学校においていただければありがたいです。
どうぞよろしくお願いいたします。



事務局の麗しき日々

- ・ノリは学芸大が大好き過ぎてもう1年通うことにしたもよう。
- ・あべちゃんが久しぶりの小管入りをしたもよう。
- ・みややんは学芸大内に研究室を持っているもよう。
- ・翔くんも小泳田地区の神代神楽の練習ため小管入りしているもよう。
- ・雫さん この夏はアメリカに行っていたもよう。
- ・ごみさんと緑さんは4年ぶりのタイキャンプに行っているもよう。
- ・冒険学校の後に、美鈴ちゃんとなのちゃんが小管に来たもよう。
- ・ヨシモトケイチちゃんがママになったもよう。
- ・ユースクは2分間で腹筋75回できる、さすが海自！！
- ・風馬はダイエットに成功したもよう。

○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称INCH（インチ）。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小管村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF 環境学習中堅指導者養成講座（のびと研修会）』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額（1～12月）です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000円 一般会員：5,000円

学生会員：3,000円 賛助会員(個人・団体)：10,000円

家族会員：6,000円 準特別維持会員：50,000円

特別維持会員：100,000円

植物と人々の博物館友の会会員：3,000円

雑穀街道特別会員：1口1,000円から

・成合基金(冒険探検基金)：「成合基金」とご記載してください。

・寄付：「寄付」とご記載してください。

①郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

②ゆうちょ銀行：店名 〇〇八 普通口座

口座番号 9479450

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマス 151号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌
<発行日>2023年8月31日
<編集>自然文化誌研究会 事務局
<発行> 特定非営利活動法人

自然文化誌研究会
The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小管村 3337-2
TEL: 090-3334-5328 (事務局 黒澤)
E-mail: npo-inch@wine.plala.or.jp
H P: <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>